校内研究通信

守破離

NO.１１

動的な学習プロセスを可視化する「三層の認知スキーマ」

本校の研究が目指す「三層の認知スキーマ」は、単なる到達目標や固定的なカリキュラムではありません。研究計画書では、「単に知識を積み重ねる静的な階層構造ではなく、学習者自身の感情や身体的な経験、他者との相互作用といった動的なプロセスを通して、常に形を変え、互いに影響し合う流動的なもの」（p.42）と定義しています。

また、「たとえ同じ学年であっても、学級の子供たちの特性や、教師の子供たちへの見取り方、働きかけ方によって、スキーマの記述内容やその変化の焦点は唯一無二のものとなる」（p.53）とあるように、これは動的な学習プロセスの中で変容し続ける、子供一人一人の固有な枠組みです。あらかじめ決められた系統に従うだけの「静的な目標」ではなく、子供たちが主体的に関わり変化していくプロセスを、私たちが共に可視化し、支援するための「動的な分析枠組み」であるといえます。

具体的な授業実践に目を向けると、その動的な姿が随所に現れていました。

理科では、基礎的スキーマを「自然の事物・現象に関する子供の今のあたりまえ」と捉えています。これはまさに本研究の分析枠組みを体現するものです。授業では、シナリオに描かれた「風は目に見えないけれどそこにある」あるいは「電気には通る道がある」といった、子供たちの「既成のスキーマ」が、糸電話の操作や実験を通して問題と向き合い、自身の認識を問い直そうとする「ゆらぎ」を生じさせようとしていました。こうした目に見えにくいスキーマの更新こそ、本研究が大切にしたい「中動態的な学び」の第一歩です。

音楽科では、時間芸術という特性上、「今その場ならではの認知形成」が求められると捉えています。即時的な自己調整によって認知のズレを修正していく姿は、まさに「中動態的な学び」そのものです。研究会では、「トルコ行進曲」のリズムに合わせて顔芸を披露した子供の姿がフォーカスされました。一見すると遊びのようですが、それはリズムという身体的経験が情動と結びつき、独自の認知スキーマを構築・表現しようとした、かけがえのない瞬間であったと捉えることができます。

（木村　仁）